

令和元年6月14日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(A)（一般）

研究期間：2014～2018

課題番号：26244024

研究課題名（和文）日本語の時空間変異対照研究のための『全国方言文法辞典』の作成と方法論の構築

研究課題名（英文）Construction of the Methodology and Building a Dictionary of Japanese Dialect Grammar for the Contrastive Study of Language Variation and Change

研究代表者

日高 水穂 (HIDAKA, mizuho)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：80292358

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 30,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本語諸方言の文法を、現在の地理的変異（方言差）の様相と歴史的变化（時代差）のプロセスの両面から総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成を目的として、要地方言の活用体系の記述を行った。本研究期間内に活用体系記述の報告書を3巻刊行し、既刊の報告書に掲載したものとあわせて、本土方言38地点、琉球方言4地点の活用体系記述を完成させた。

また、日本語文法の歴史的变化と地理的変異を総合的に記述する枠組みを確立し、現代語、古典語、諸方言の文法を比較・対照する「時空間変異対照研究」の方法論を構築することを企図して、諸方言の文法記述と文献方言対照研究をテーマとした研究発表会を3回にわたり開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語諸方言の文法の対照研究のためには、統一的な記述方針のもとに行われた要地方言の精緻な文法記述が必要である。本科研では、用言（動詞・形容詞・名詞述語）の活用体系の記述を最優先に行ってきたが、これは活用体系の記述が述語の文法カテゴリーに関わる文法形式を網羅的に記述することにつながるためである。

諸方言の活用体系の記述には多くの研究の蓄積があるが、それらは個別方言を個別の記述方針のもとに記述するものが大多数である。本研究の取り組みは、統一的な文法記述の枠組みを構築し、その記述データを広く一般に公開することにより、方言対照研究の進展と日本語諸方言の多様性への理解を深めることを企図するものである。

研究成果の概要（英文）：The main study during this research period was to investigate the inflectional paradigm of predicates in Japanese dialects, which is a part of process to build a dictionary of Japanese dialect grammar that contributes to the comprehensive description from the geographical and historical point of views. The three volumes of report on inflectional paradigm have been published in this period, and the reports cover 38 dialects in main lands and 4 dialects in Ryukyu islands in total, including those published in the previous period.

In addition, the research workshop was held once in a year on the theme of grammatical descriptions of dialects and contrastive studies of Japanese variations. Those workshops aimed to establish a framework that comprehensively describes geographical variations and historical changes in Japanese grammar, and to construct a methodology of the contrastive/comparative study in diachronic and synchronic variations in Japanese.

研究分野：日本語学

キーワード：方言学 日本語学 国語学 対照研究 活用体系 方言文法

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現代語を対象にした共時的な文法研究が一定の成果を収めつつある現在、その成果を古典語や諸方言の文法の精密な記述に応用する研究が盛んに行われるようになってきている。さらに、その発展として、現代語、古典語、諸方言の文法を対照させ、日本語文法の歴史的变化と地理的変異の総合的な解明をめざす研究が模索されるようになってきている。

この「歴史的变化と地理的変異」を合わせて「時空間変異」と呼ぶとすると、今後、こうした研究は「時空間変異対照研究」として、日本語研究の一分野をなすものとなることが予想される。今はそのための言語資料の整備と方法論の構築を進めつつある段階だと言えるが、方言研究の分野からこうした取り組みに寄与するためには、個々の方言に関する網羅的な記述とともに、どの方言にどのような文法現象があるかということ、俯瞰的に把握できるデータを提供する必要がある。

こうした観点から、本科研の研究代表者が2001年に組織した「方言文法研究会」では、既存の方言文献資料のデータベース化、諸方言の文法の記述的研究を行ってきた。

本科研の前身となる科研費(基盤研究(C)平成19-21年度、基盤研究(B)平成21-25年度)の研究成果として、すでに、『全国方言文法辞典資料集(1) 原因・理由表現編』(2010年)、『全国方言文法辞典』のための条件表現・逆接表現調査ガイドブック』(2010年)、『全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』(2014年)を刊行した。本科研は、こうした研究の蓄積の上に立ち、さらに、時空間変異対照研究のための資料整備と方法論の構築へ向けて、研究の進展を試みるものである。

2. 研究の目的

日本語は、歴史的文献資料が豊富であり、地理的変異が多様であることから、「時空間変異」(=歴史的变化と地理的変異)の対照研究に適した条件を備えている。

本研究では、日本語諸方言の文法を、現在の地理的変異(方言差)の様相と歴史的变化(時代差)のプロセスの両面から総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成を目的に、調査項目作成、現地調査、データベース作成、歴史的变化調査を行う。さらに、調査データを集積するウェブシステムを構築し、最終的な研究成果として『全国方言文法辞典』の基礎資料(冊子及びウェブ版)を作成する。この取り組みによって、日本語文法の歴史的变化と地理的変異を総合的に記述する枠組みを確立し、現代語、古典語、諸方言の文法を比較・対照する「時空間変異対照研究」の方法論を構築する。

3. 研究の方法

上記の目的のために、本研究期間においては、統一的な記述方針のもとに諸方言の活用体系記述を行うこととし、以下のような共同研究体制をとった。

時空間変異対照研究を担う専門性の高い研究者との共同研究体制。

ウェブシステムの構築を担う情報工学専門の研究者との共同研究体制。

要地方言の記述を担当する研究協力者との共同研究体制。

については、本研究が、現代語、古典語、琉球語を含む諸方言の文法研究に携わる研究者の長年にわたる共同研究の蓄積の上に行われるものであることを意味している。

については、本研究のデータ共有と成果報告の要であるウェブシステムの構築を、専門の研究者とともに取り組むことのできる体制であることを示している。

については、辞典項目記述の基礎資料となる要地方言の調査データを、各地の研究者に依頼して収集・蓄積する体制をとることを示している。

上記の3点は、要するところ、本研究が人的ネットワーク構築型の研究プロジェクトとして進めていくものであったことを意味している。

4. 研究成果

(1)以下の研究成果報告書を刊行およびWeb公開した。既刊の『全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』に掲載したものとあわせて、本土方言38地点、琉球方言4地点の活用体系記述が完成した。

・『全国方言文法辞典資料集(3) 活用体系(2)』(2017年1月刊行)

[概要]要地方言の活用体系記述として、山形県山形市方言(竹田晃子・澤村美幸)、茨城県水海道方言(佐々木冠)、群馬県藤岡市方言(新井小枝子)、東京都方言(三井はるみ)、石川県能登島方言(野間純平)、静岡県湖西市方言(森勇太)、愛知県新城市作手方言(山田敏弘)、兵庫県神戸市方言(酒井雅史)、岡山県岡山市方言(小島裕将)、広島県三次市方言(小西いずみ)、高知県宿毛市方言(松丸真大)、大分県由布市庄内町方言(松田美香)、鹿児島県甕島里方言(平塚雄亮)、沖縄県多良間島方言(下地賀代子)の記述を収録。

・『全国方言文法辞典資料集(4) 活用体系(3)』(2018年3月刊行)

[概要]要地方言の活用体系記述として、宮城県仙台市方言(武田拓)、福島県福島市方言(半沢康)、千葉県南房総市三芳方言(佐々木冠)、福井県大野市方言(松倉昂平)、鳥取県倉吉市方言(野間純平)、島根県出雲市方言(平子達也・友定賢治)、愛媛県松山市方言(久保博雅)、長崎県佐世保市宇久町方言(門屋飛央)、鹿児島県鹿児島市方言(平塚雄亮)の記述を収録。

・『全国方言文法辞典資料集(5) 活用体系(4)』(2019年3月刊行)

[概要] 要地方言の活用体系記述として、東京都八丈島三根方言(三樹陽介)、新潟県魚沼市方言(吉田雅子)、長野県茅野市方言(大西拓一郎)、和歌山県田辺市方言(西尾純二・澤村美幸)、香川県高松市方言(乙武香里)、佐賀県武雄市方言(原田走一郎)、沖縄県竹富町黒島方言(原田走一郎)の記述を収録。

・『全国方言文法辞典資料集(6) 滋賀県長浜市方言談話資料』(2019年3月刊行)

[概要] 滋賀県長浜市内で収集した会話の文字化データを収録。

(2)本研究課題の目的の一つである、現代語、古典語、諸方言の文法を比較・対照する「時空間変異対照研究」の方法論の構築のための具体的な取り組みとして、諸方言の文法記述と文献方言対照研究をテーマとする以下の研究発表会を開催した。

・方言文法研究会 2016年度研究発表会(2017年2月28日、関西大学)

[概要] 「江戸・東京語と上方・関西語の対照研究」をテーマに、日高水穂「否定疑問形による確認要求表現の東西差」、森勇太「近世・近代における申し出場面の授受表現の運用—江戸・東京と上方・関西の対照から—」、矢島正浩「近代話し言葉資料における接続詞的用法—東西の嗜好性の相違に注目して—」の各発表を行った。

・方言文法研究会 2017年度研究発表会(2018年3月3・4日、関西大学)

[概要] 「文献資料を用いた方言文法研究」をテーマに、日高水穂「読みがたりむかし話資料にみる文末形式の全国概観」、酒井雅史「読みがたりむかし話資料にみる素材待遇形式—京都・大阪・滋賀—」、森勇太「近世後期洒落本に見る行為指示表現の地域差—京・大阪・尾張・江戸の対照—」、矢島正浩「近世・近世日本語資料が映す東西差—逆接確定辞による接続詞・終助詞的用法の発達をめぐって—」、「記述と対照による方言文法研究」をテーマに、日高水穂「対照方言学の方法—俯瞰する方言研究—」、松丸真大「確認要求表現の全国分布概観」、船木礼子「とりたて表現の全国分布概観」の各発表を行った。

・方言文法研究会 2018年度研究発表会(2019年3月2・3日、大阪ガーデンパレス)

[概要] 5年間の本科研の研究成果を総括し、さらに今後の発展的な研究課題の発掘をめざして、日高水穂「方言文法研究の課題と展開」、松田美香「宮崎県椎葉村方言の可能表現—方言接触地域の体系—」、青木博史「「です」の文文化」、中川寛之「愛媛県宇和島市の方言文末詞—「テヤ」の用法変化を中心に—」、高木千恵「大阪方言の終助詞ナ・イナについて」、中村京介「長崎県五島列島宇久島野方言の文法概説:条件表現の調査報告を中心に」、齊藤美穂「奄美大島瀬戸内方言における条件形式とその用法」、前田直子「条件文主節の統語的・意味的特徴について」の各発表を行った。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 40 件)

小西いずみ、富山市方言の動詞「当たる」:授与自動詞および補助動詞としての用法、『日本語学』、38(4)、査読無、2019年、pp.22-31

酒井雅史、関西方言における素材待遇形式の分布—読みがたり昔ばなし資料を手がかりに—、『阪大日本語研究』、31、査読無、2019年、pp.1-15(左)

平塚雄亮、福岡市方言の準体助詞にみられる言語変化、『中京大学文学会論叢』、5、査読無、2019年、pp.71-88

船木礼子(橋本礼子)、大分方言のとりたて形式「ンジョー」の意味・機能—昔話・民話を資料として、『神女大國文』、30、査読無、2019年、pp.15-33(左)

三井はるみ、条件表現の全国分布に見られる経年変化—予測的条件文の場合—、『国語研究』、82、査読無、2019年、pp.40-59(左)

矢島正浩、近現代話し言葉資料における原因理由系の接続詞的用法について、『国語国文学報』、77、査読無、2019年、pp.1-13

高木千恵、大阪方言の行為要求表現における終助詞ナの共起と前接語の長呼について、『方言の研究』、4、査読有、2018年、pp.21-48

高木千恵、大阪方言の補充疑問文と終助詞ナ・イナについて:形態統語的な特徴を中心に、『待兼山論叢』、52、査読無、2018年、pp.39-56

日高水穂、昔話の談話構造と表現形式にみる地域性、『國學院雑誌』、119(11)、査読無、2018年、pp.217-230

日高水穂、対照方言学の方法論と展開、『関西大学文学論集』、68(3)、査読無、2018年、pp.139-166、<http://doi.org/10.112/16466>

矢島正浩、条件表現史から見た近世—時代区分と東西差から浮かび上がるもの—、『日本語学』、37(13)、査読無、2018年、pp.32-42

下地賀代子、南琉球・多良間島方言の「移動の表現」に関わる動詞の種類(2)—モノの移動の表現—、『南島文化 沖縄国際大学南島文化研究所紀要』、40、査読有、2018年、pp.23-40

矢島正浩、タラ節の用法変化、『国語国文学報』、76、査読無、2018年、pp.15-31

酒井雅史、野間純平、大阪府八尾市方言の素材待遇形式ヤルの機能—三者の関係を表すマーカ—、『日本語の研究』、14(1)、査読有、2018年、pp.1-17

船木礼子(橋本礼子)、石見方言・長門方言における推量表現形式「ロー」の使用状況、『神女大國文』、29、査読無、2018年、pp.14-29(左)

- 野間純平、宮津市方言の原因・理由表現デ・サカイ—談話データにもとづく使い分けの実態—、『阪大社会言語学研究ノート』、15、査読無、2017年、pp.22-35、<https://doi.org/10.18910/67210>
- 平塚雄亮、甑島里方言の形容詞連用形、『西日本国語国文学』、4、査読有、2017年、pp.74-83
- Heffernan, Kevin and Hiratsuka, Yusuke, Morphological relative frequency impedes stylistic variation: Evidence from vernacular Japanese, *Asia-Pacific Language Variation*, 3(2)、査読有、2017年、pp.200-231、<https://doi.org/10.1075/aplv.16009.hef>
- 下地賀代子、南琉球・多良間水納島方言形容詞の叙述法断定の形式、『沖縄国際大学日本語日本文学研究』、22(1)、査読無、2017年、pp.61-74
- 船木礼子(橋本礼子)、中土佐町久礼方言の条件表現体系—バ融合形の用法を中心に—、『神女大國文』、28、査読無、2017年、pp.1-18(左)
- ⑲ 山田敏弘、岐阜県方言と愛知県方言の連続性、『岐阜大学教育学部研究報告(人文)』、65(2)、査読無、2017年、pp.1-10
- ⑳ 日高水穂、方言接触による授与動詞体系の変容—FPJD 調査より—、『国立国語研究所論集』、11、査読有、2016年、pp.11-24
- ㉑ 日高水穂、方言研究の研究動向と隣接他分野との接点、『方言の研究』、2、査読有、2016年、pp.21-38
- ㉒ 青木博史、文献国語史の研究動向と方言研究との接点、『方言の研究』、2、査読有、2016年、pp.117-130
- ㉓ 小西いずみ、対照方言学的研究のこれまでとこれから、『方言の研究』、2、査読有、2016年、pp.99-116
- ㉔ 日高水穂、述語制の表現体系から見る日本語諸方言、『季刊 iichiko』、129、査読無、2016年、pp.27-44、
- ㉕ 日高水穂、近畿中央部方言におけるシテイル相当形式の動態—現在形と過去形の非対称現象をめぐって—、『国文学』、100、査読無、2016年、pp.85-99(左)
- ㉖ 日高水穂、方言接触による授与動詞体系の変容—FPJD 調査より—、『国立国語研究所論集』、11、査読有、2016年、pp.11-24
- ㉗ 下地賀代子、南琉球・多良間島方言の「移動の表現」に関わる動詞の類型()—ヒト=イキモノの移動の表現—、『琉球大学言語文化論叢』、13、査読無、2016年、pp.45-65
- ㉘ 林良雄、方言研究におけるGISの活用に関する一考察、『秋田大学教育文化学部研究紀要 自然科学』、71、査読無、2016年、pp.89-96
- ㉙ 船木礼子(橋本礼子)、方言のとりたて助詞の使用傾向—大阪方言・京都方言の限定のとりたて表現に注目して—、『神女大國文』、27、査読無、2016年、pp.8-19(左)
- ㉚ 森勇太、近畿方言における命令表現の地域差、『関西大学文学論集』、65(3・4)、査読無、2016年、pp.115-134
- ㉛ 森勇太、甑島平良方言の敬語、『国文学』、100、査読無、2016年、pp.464-446
- ㉜ 矢島正浩、連用形+ンカの用法が示す近世後期上方語の表現指向、『国語国文学報』、74、査読無、2016年、pp.15-34
- ㉝ 野間純平、石川方言におけるノダ相当形式—新形式の成立過程に注目して—、『方言の研究』、1、査読有、2015年、pp.251-276
- ㉞ 小西いずみ、広島市方言の対格標示—談話資料による計量的把握—、『国語教育研究』、56、査読無、2015年、pp.259-270
- ㉟ 酒井雅史、滋賀県長浜市における素材待遇形式の運用—流動的運用とその要因—、『阪大日本語研究』、27、査読無、2015年、pp.161-192
- ㊱ 森勇太、条件表現を由来とする勧め表現の歴史—江戸・東京と上方・関西の対照から—、『近代語研究』、18、査読有、2015年、pp.45-64
- ㊲ 青木博史、接続助詞「のに」の成立をめぐって、『日本語文法史研究』、2、査読無、2014年、pp.83-107、
- ㊳ 森勇太、行為指示表現としての否定疑問形の歴史—上方・関西と江戸・東京の対照から—、『日本語文法史研究』、2、査読無、2014年、pp.153-172

[学会発表](計14件)

Koko TAKEDA, Geographical distribution of verbs and suffixes verbalizing mimetics, Tradition and Innovation in the Japanese language, International Symposium on Japanese Studies, Organizer: Center for Japanese Studies, University of Bucharest, 2018年

松丸真太、関西方言の否定形式ナイ・アラヘン・チガウの諸用法、日本語文法学会第18回大会、2017年

Hiratsuka, Yusuke and Harada, Soichiro, Adjective suffix variation in Kagoshima dialect, METHODS XVI, 2017年

日高水穂、竹田晃子、岩手方言の条件形式-aba形の由来をめぐって—分水嶺型分布の検証—、日本語学会2016年度秋季大会、2016年

青木博史、歴史語用論研究の可能性、日本語学会2016年度秋季大会、2016年

平塚雄亮、甌島里方言の形容詞連用形にみられる異分析、第 66 回西日本国語国文学会、2016 年
 青木博史、連体形による文終止の一般化<ワークショップ：日本語の構文と構文変化>、日本語学会 2015 年度春季大会、2015 年
 青木博史、準体助詞「の」と文法化・構文化、NINJAL 国際シンポジウム「文法化：日本語研究と類型論的研究」、2015 年
 竹内史郎、松丸真大、關西方言の格標示のとりたて性と分裂自動詞性、日本言語学会第 151 回大会ワークショップ「日本語方言のケースマーケティングのとりたて性と分裂自動詞性」、2015 年
 森勇太、連用形命令の取り入れの地域差—大阪方言と広島方言の対照から—、日本語学会 2015 年度秋季大会、2015 年
 Heffernan, Kevin and Hiratsuka, Yusuke, The Collapse and Replacement of the Verbal Negative Mode System in Kansai Spoken Japanese, NWAV-AP3, 2014 年
 ヘフアン・ケビン、平塚雄亮、關西方言話者が共通語形を選択するとき—認知的な観点から—、社会言語科学会第 34 回大会、2014 年
 酒井雅史、ロールプレイ会話にみる敬語運用の世代差・性差・地域差—丁寧語使用を中心に—、社会言語科学会第 34 回大会、2014 年
 船木礼子、高知方言にみる推量表現形式のバリエーションと機能の変化、日本語学会 2014 年度秋季大会、2014 年

〔図書〕(計 10 件)

方言文法研究会(編)(編者代表：小西いずみ、日高水穂) / 三樹陽介、吉田雅子、大西拓一郎、西尾純二、澤村美幸、乙武香里、原田走一郎、『全国方言文法辞典資料集(5) 活用体系(4)』、科学研究費補助金研究成果報告書、2019 年、178 頁
 方言文法研究会(編)(編者代表：酒井雅史)、『全国方言文法辞典資料集(6) 滋賀県長浜市方言談話資料』、科学研究費補助金研究成果報告書、2019 年、125 頁
 藤田保幸、山崎誠(編著) / 矢島正浩、森勇太、小西いずみ、日高水穂、松丸真大ほか(総勢 28 名)、『形式語研究の現在』、和泉書院、2018 年、608 頁
 方言文法研究会(編)(編者代表：小西いずみ、日高水穂) / 武田拓、半沢康、佐々木冠、松倉昂平、野間純平、平子達也、友定賢治、久保博雅、門屋飛央、平塚雄亮、『全国方言文法辞典資料集(4) 活用体系(3)』、科研費研究成果報告書、2018 年、219 頁
 大西拓一郎(編著) / 日高水穂、船木礼子、松田美香、小西いずみ、半沢康ほか(総勢 14 名)、『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』、朝倉書店、2017 年、346 頁
 有田節子(編著) / 江口正、前田直子、鈴木泰、矢島正浩、青木博史、日高水穂、三井はるみ、竹田晃子、『日本語条件文の諸相—地理的変異と歴史的变化—』、くろしお出版、2017 年、245 頁
 森山卓郎、三宅知宏(編著) / 日高水穂、前田直子、山田敏弘ほか(総勢 17 名)、『語彙論的統語論の新展開』、くろしお出版、2017 年、275 頁
 山田敏弘、『岐阜県方言辞典』、岐阜大学、2017 年、480 頁
 方言文法研究会(編)(編者代表：小西いずみ、日高水穂) / 竹田晃子・澤村美幸、佐々木冠、新井小枝子、三井はるみ、野間純平、森勇太、山田敏弘、酒井雅史、小畠裕将、小西いずみ、松丸真大、松田美香、平塚雄亮、下地賀代子、『全国方言文法辞典資料集(3) 活用体系(2)』、科学研究費補助金研究成果報告書、2017 年、179 頁
 小林隆(編著) / 大西拓一郎、日高水穂ほか(総勢 16 名)、『柳田方言学の現代的意義 あいさつ表現と方言形成論』、ひつじ書房、2014 年、416 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)
 取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ「方言文法研究会・全国方言文法データベース」
<http://hougen.sakura.ne.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：青木 博史
 ローマ字氏名：(AOKI, hirofumi)
 所属研究機関名：九州大学
 部局名：人文科学研究院
 職名：准教授
 研究者番号(8桁)：90315929

研究分担者氏名：小西 いずみ
 ローマ字氏名：(KONISHI, izumi)
 所属研究機関名：広島大学
 部局名：教育学研究科
 職名：准教授
 研究者番号(8桁)：60315736

研究分担者氏名：小柳 智一
ローマ字氏名：(KOYANAGI, tomokazu)
所属研究機関名：聖心女子大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：80380377

研究分担者氏名：酒井 雅史
ローマ字氏名：(SAKAI, masashi)
所属研究機関名：大阪大学
部局名：文学研究科
職名：助教
研究者番号(8桁)：20823777

研究分担者氏名：小嶋 賀代子(下地 賀代子)
ローマ字氏名：(KOJIMA, kayoko
(SHIMOJI, kayoko))
所属研究機関名：沖縄国際大学
部局名：総合文化学部
職名：准教授
研究者番号(8桁)：40586517

研究分担者氏名：高木 千恵
ローマ字氏名：(TAKAGI, chie)
所属研究機関名：大阪大学
部局名：文学研究科
職名：准教授
研究者番号(8桁)：50454591

研究分担者氏名：竹田 晃子
ローマ字氏名：(TAKEDA, koko)
所属研究機関名：立命館大学
部局名：衣笠総合研究機構
職名：研究員
研究者番号(8桁)：60423993

研究分担者氏名：中本 謙
ローマ字氏名：(NAKAMOTO, ken)
所属研究機関名：琉球大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：10381196

研究分担者氏名：野間 純平
ローマ字氏名：(NOMA, junpei)
所属研究機関名：島根大学
部局名：学術研究院人文社会科学系
職名：講師
研究者番号(8桁)：30780986

研究分担者氏名：橋本 礼子(船木 礼子)
ローマ字氏名：(HASHIMOTO, reiko
(FUNAKI, reiko))
所属研究機関名：神戸女子大学
部局名：文学部
職名：准教授
研究者番号(8桁)：00454736

研究分担者氏名：林 良雄
ローマ字氏名：(HAYASHI, yoshio)
所属研究機関名：秋田大学

部局名：教育文化学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：90211490

研究分担者氏名：平塚 雄亮
ローマ字氏名：(HIRATSUKA, yusuke)
所属研究機関名：中京大学
部局名：文学部
職名：講師
研究者番号(8桁)：70757822

研究分担者氏名：前田 直子
ローマ字氏名：(MAEDA, naoko)
所属研究機関名：学習院大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：30251490

研究分担者氏名：松丸 真大
ローマ字氏名：(MATSUMARU, michio)
所属研究機関名：滋賀大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：30379218

研究分担者氏名：三井 はるみ
ローマ字氏名：(MITSUI, harumi)
所属研究機関名：大学共同利用機関法人人間
文化研究機構国立国語研究所
部局名：言語変異研究領域
職名：助教
研究者番号(8桁)：50219672

研究分担者氏名：森 勇太
ローマ字氏名：(MORI, yuta)
所属研究機関名：関西大学
部局名：文学部
職名：准教授
研究者番号(8桁)：90709073

研究分担者氏名：矢島 正浩
ローマ字氏名：(YAJIMA, masahiro)
所属研究機関名：愛知教育大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：00230201

研究分担者氏名：山田 敏弘
ローマ字氏名：(YAMADA, toshihiro)
所属研究機関名：岐阜大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：90298315

(2)研究協力者
研究協力者氏名：仲原 穰
ローマ字氏名：(NAKAHARA, jo)

研究協力者氏名：吉田 雅子
ローマ字氏名：(YOSHIDA, noriko)